

当会員伊藤千恵さんの愛馬の引退が大きく報道されました

編集部より伊藤さんにお願ひて、乗馬に興味を持たれた経緯からバーデン&バーデンとの出会い、本記事の「有終の美を飾って」の引退と、その後熊本で地震を怖がることもなく、高校生にかわいがられ幸せな生活を送っていることなど、心温まるお話を寄せて頂きました。次ページ以下に謹んで掲載させていただきます。

2015年11月7日付 朝日新聞夕刊(東京版) 6面

学生馬術で全国最多V 関大の名馬

バーデン&バーデン有終



95組で唯一の減点ゼロ

学生馬術界で活躍した名馬が、有終の美を飾った。最後の全国大会となった全日本学生賞典障害飛越競技大会で、歴代最多の5度目の優勝を果たした。惜しまれながら、引退する。

1日、東京・馬事公苑。最後だと分かっているよう関大の19歳馬バーデン&バーデン号は鞍上の松水優斗(18)とともに、大トリでスタートラインに立った。「瞬間、(バーデン号の)目つきが変わった。これが

王者4人生む

障害飛越はコース上の障害物を飛び越えながら技術とタイムを争う競技。障害

物を越えずによけたり、当たったりすると減点されるが、松水・バーデン組は2日間の日程で95組の人馬のうち唯一、減点ゼロを守り抜いた。バーデンに乗って全日本王者に輝いたのは松水で4人目だ。

競技用に輸入されていたバーデンが、関大に引き取られたのは10年前。競馬を引退したサラブレッドが流れてくるなどの多い馬術界では珍しく、ドイツ原産のハノーバーという乗馬向き

余力持ち引退

馬術界の全盛期は11、12歳ごろとされる。バーデンに衰えはないが、「ポロポロ」になるまでやらせたくない。誇りを守ってやりたい」と若原さんは引退の理由を説明する。急激に運動量を落とさないために

来春から熊本県の高校で競技を続け、その後の余生は九州の牧場で過ごす予定。第二のステージを保障されない場合も多い馬術界では、異例の待遇だ。

障害飛越は「馬7分、乗り(騎手)3分」と言われ、馬の能力が勝敗を左右する面が大きいという。88年ソウル五輪に選手として出場し、今は関大技術顧問の若原尚さん(70)は「バーデンの強みは注意力

と勇氣。競技で求められる要素を併せている。何頭もいい馬を見てきたが、勝負に関しては一番頼りになる馬でした」。五輪を目指すレベルの団体から購入を打診されたこともある。

有終の美を飾ったバーデン&バーデン号と、松水優斗(大阪府高槻市、伊藤菜々子撮影)

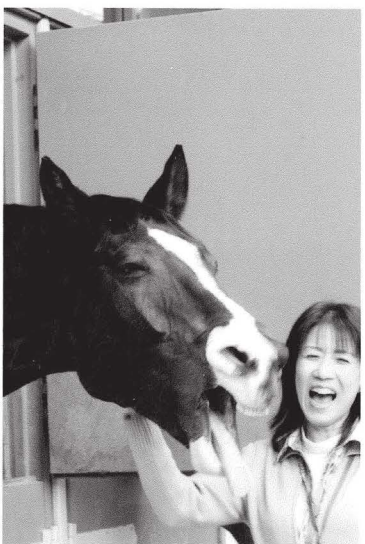
東京版に関大のスポーツ記事が大きく載るのは、フィギュアスケートを除き異例のこと、伊藤さんには東京のお友達から多数の連絡があったそうです。

2016年3月、愛馬を熊本へ 80歳を生きる — 若者を育て続けるバーデンバーデン

千三小二回生 伊藤 千恵

千里山会事務局長の奥田陽一様から、愛馬『バーデンバーデン号』についての原稿のご依頼をいただいた。愛馬との11年間に想いを馳せると、その縁は子供の頃、そして千里山につながる。前置きが長くなるが、お許しいただきたい。

全日本学生優勝後、くつろぐバーデンと



私が馬の眼に魅かれ、馬術の世界に足を踏み入れたのは10歳の時。母に連れられて服部緑地公園内の乗馬センターに馬を見に行ったのがきっかけであった。「乗りたい」という私に、両親からの反対はなかった。そして母は、千里山在住で関西大学(関大)馬術部ご出身の宮本恒夫さんに頼みに行ってくれた。宮本さんは朝日新聞の記者をされていたが、昭和15年に予定されていた東京オリンピックの候補選手であった。私の馬術の最初の師として基礎を教わった方である。高校生になって二人目の師についた。杉谷昌保さん。今回のリオデジャネイロで夏の五輪最多の6回出場を果たす杉谷泰造選手の父上だ。自らも3回五輪に出場され、日本の馬術界を牽引してこられた。そして大学生になってご指導いただいたのが若原尚さん。関大馬術部ご出身、関大の職員で、キャリアセンター事務部長も務められる一方、オリンピックにも出場された。この若原さんにご指導いただいている時に、全日本で優勝することができたのだ。

その後、国際大会で現〇〇会長の竹田恒和さんと同率の6位入賞を機に、引退した。自分なりの「引き際の美学」があり、惜しまれながら引退したいと思っていたからだ。しかし、一気に人生目標を失った私は、苦しい日々を過ごした。そして東京行きを決心、父の経営する出版社の東京支社に「おしかけ社員」で入社した。

その年末の日本ペンクラブの会合に、父について参加した際、会長の遠藤周作さんに代わってくじ引きで登壇された副会長の齋藤茂太さんが、私に海外旅行を当ててくださった。そのご縁で、茂太先生が会長を務められる日本旅行作家協会に入れていただくこととなった。経済界のトップの方々もおられ、自分なりの人間関係が少しずつできてきた。会社が40周年を迎えようとしていた頃であった。なかなか後継者が育たず、相変わらず父が社長であった。そこで一大決心をする。「娘の私にやらせるか、一代で閉めるか、一つに一つを選んでください」。若さゆえの無謀な申し入れであったが、父は受け入れてくれた。

そして社長交代も兼ねた40周年謝恩パーティーを行った際、関大馬術部の監督になっておられた若原さんがお祝いに駆けつけてくださった。そこで「君、関大のコーチをやってくれへんか」。自らの健全な心身の維持も経営者の責務と考え、東京で予定の無い週末だけ、ということでお引き受けした。全日本優勝に導いてくださった若原さんへの、そしてその時、馬を置かせていただいていた関大馬術部へのご恩返しになればとの想いもあった。

大学のクラブ活動は課外教育の一環であり、「自主自治」である。すなわち、馬術部も学生自ら運営する。馬の維持管理等の費用も学生のアルバイトによるところが大きい。学問との両立を図るのは容易ではなからうと、コ

ーチになって数年経った頃から、馬を買って預託料を払い学生に乗せることを始めた。そのうち、せつかく提供するなら、もつと貢献できる馬が良いと考えるようになった。そこで馬選びの天才の若原さんに依頼し、バーデンと出逢うことになった。ある乗馬クラブがドイツから入れたが、乗りこなせずもてあましていた馬であった。

バーデンを関大厩舎に迎えたのが、2005年2月のこと。子どもの頃から馴染みのあった千里山の厩舎から、その前年の年末に、高槻キャンパスに移転していた。バーデンは注意力があり怖がりなので、すぐ何かに反応しては、走り出して跳ねるか、跳ねてから走り出すか、いずれにしても学生はよく落とされた。何人か乗せる中、一番馬の合う「学生を専属にした。女子学生だった。スポーツ推薦で入ってきた経験豊富な学生だったが、乗りこなせず苦しんだ。我々指導者にも根気が必要だった。誰より、バーデンが辛抱強かった。学生がうまくなるのが先か、バーデンが潰れるのが先か、と心穏やかではない日々が続いた。普通の馬ならとくに潰れている状態でも、バーデンに変化はなかった。「繊細なのか図太いのか、アホか賢いかわからん馬だ」と思った。

そのような中、全日本学生に臨んだ。バーデンは日頃とは打って変わって、「自分の使命」とばかり懸命に乗り手をカバールし、飛越した。そして優勝。その後も、どの学生も

なかなか乗りこなせず、技術力と精神力の向上に努力を要した。これまで5人の学生を乗せて10回、全日本学生に出場。そのうち5回の優勝を果たした。日頃は厩舎でごろ寝、練習はイヤイヤ、でもやる時はやる。勤勉なのか怠け者なのか分からないが、「オン・オフ」の切り替えに優れているのであろう。

「無事これ名馬」の喩え通りの馬であったが、歳相応の機能低下は間違いなく始まっていた。17歳の時に優勝したので、もう厳しい要求はやめて、少しのんびりさせてやりたいと、私が気楽にローカル試合に出て楽しんで、その後、放牧に出そうと考えた。ローカル試合のつもりが結局、一昨年には31年ぶりの国体、昨年には32年ぶりの全日本出場となり、それなりの成績も収められたが、全日本学生にも使うことになってしまった。関大として、バーデンが抜けると厳しい戦いになるので「チームのために」頑張ってもらうことになったのだ。一昨年は同い年の学生を乗せて、また昨年は自分より年下の学生を乗せて出場。全国の馬術指導者たちから「まだまだ元気」「もったいない」と言われたが、昨年は引退を明言した。余力を残して引かせてやりたかった。若原さんも、誇りと名誉を守ってやりたい、と考えておられた。

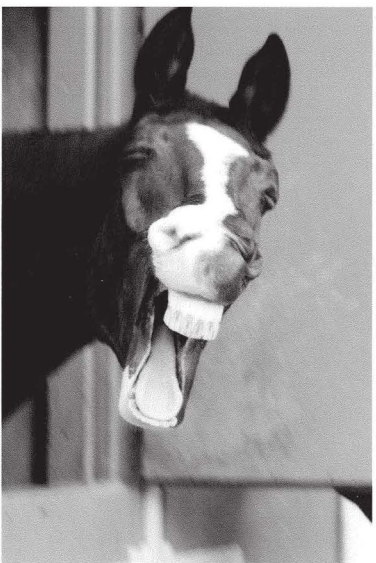
絡まつて、人馬転倒してしまった。関係者はもちろん、観客も凍りついた。出血があったり歩様がおかしくなると出場できなくなる。普通は怪我ひとつないというのはありえない状況であった。スチユワードがチェックしたが、全く異常なし。もちろん、私も真つ先に確認した。そして、そのようなアクシデントがあると注意力のある馬ほど怖がつて、次は障害を飛ばなくなるものである。しかしバーデンは、「注意力」と「勇氣」という、なかなか同時に持ち合わせる事が難しい要素を兼ね備えていた。絶対に飛んでくれない、そして障害を落とさないという、稀な馬なのだ。もう一度その障害に向かい、完飛。そして入場。いつも通り、乗り手のミスのカバーしながら、涼しい力才をして減点ゼロで帰ってきた。

二日目は初日の成績の悪い順である。減点ゼロの人馬は3組であった。その中でもバーデンはトップタイムであり、関大が団体でトップに立っていたので、最終走行となった。先に走行を終えた減点ゼロの人馬はそれぞれミスがあった。いよいよバーデン入場。そして皆が固唾を呑んで見守る中、バーデンは次々と障害をクリアし、見事減点ゼロでゴールした。歓声と拍手が沸き起こった。会場中の人々がバーデンの優勝を祝福してくれた。ウイニングランで馬場を走るバーデンの眼は、達成感に満ちていた。「自ら花道を飾ったな」と私は思った。



長崎国体に出場する
バーデンと筆者
(平成26年10月)
Uストリームの映像
より

その最後の全日本。初日、二日目と二回の走行で勝負が決まる、その初日。騎乗者は緊張のあまり準備運動での出番直前の飛越で誘導に失敗し、障害がバーデンの脚に



全日本学生優勝後のバーデンの高笑い

北海道での放牧生活は厳寒ゆえ馬の健康に良くないと
のことで断念、余生は阿蘇の麓で決めた。第一線で活躍
していた競技馬が急に引退するとガクつときてボケたりす
るので、少しレベルを落として競技に出しながら少しずつ
引かせたほうがいい、との獣医のアドバイスがあった。バー
デンの扱いには、能力を要した。適任がおられた。日本中
央競馬会(JRA)を退職され、故郷に戻り、母校の高校馬
術部のコーチをしておられる宮崎栄喜さんという方で、若
原さんとはオリンピックのチームメイトだった。「RYA時代
は、関大馬術部からRYAに入社した3人全員の指導に当
たってくださったという縁もある。お人柄の良さは熟知

しており、近くに放牧場もあるので、将来も約束されている。今度は高校生に夢を与えられれば嬉しいと思います、宮崎さんに委ねることにした。

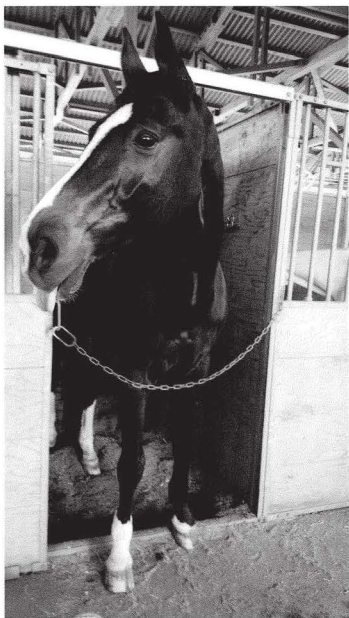


4月からの新年度に向けて、今年の3月12日にバーデンは熊本に旅立った。着くなり、一年生の女子が「この馬の馬付きになりたい」と申し出たらしい。「モノも言わなかった子が積極的に意思表示した。バーデンは不思議な力がありますねー」と宮崎さんは驚いておられた。

熊本の高校にて
撮影会も意に介さず

熊本に行つて一ヶ月後に震災は起こった。幸い、バーデンのいるところは被害がほとんどなく、生徒も馬も無事であった。あの怖がりのバーデンはさぞ揺れにビクビクしている

高校総体の厩舎でのんびりするバーデン



生徒たちから「バーちゃん、バーちゃん」とかわいがられ、日課である練習、その後、放牧場でゴロゴロ、ポカリスエットをゴクゴク、全身シャワーですっきり、お散歩しながら草をムシヤムシヤ、そして、ごはんをパクパク・・・結構に過ごしている。

人間で言えば80歳。いつまでも、未来ある若者を育てるという使命を果たしている、じいちゃんのバーちゃん、万歳！

ことだろうと胸を痛めていたが、ずっと厩舎に泊り込んでおられた宮崎さんの話では、若い馬たちが騒ぐ中、どっしり構えて窓の外を眺めていたという。

震災で4月の試合は中止、5月の試合は日延べして行われた。その時は調子が出なかったという。多分、大した試合ではないと思ひ、「オフ」状態であったのであろう。6月の高校総体は是非来てほしいと言われていたので会場の菊池農高に行った。厩舎からカオを出すバーデンはのんびりしていた。そこで私は「今までは秋の全日本学生で頑張ってきたけど、これからはこの大会で頑張ってもらわないといけないんだよ」と言つて聞かせた。すると驚いたことに、急に頭を上げて厩舎内をぐるぐる回り出し、試合で気持ちが高ぶった時の「前がき」というしぐさをし出したのだ。どうやら思い出して、スイッチが入ったらしい。そして、複合という競技で優勝してくれた。若い頃から乗り手を助けてきたバーデンは健在だった。それとともに、新たなカオも見た。良い歳の取り方をしているのだ。未熟な高校生たちに対して、相手のレベルに合わせた対応をしている。好々爺然としていた。

梅雨の晴れ間の放牧中、学生とお昼寝……

